

■津久井龍雄 国家社会主義者。維新の志士の風格をもつ右翼理論家として軍と諍った。

つくいたつお

田中正造直訴1901＝ 栃木県大田原で生まれる。

日露戦争終・1905＝ 4歳：

韓国併合・・1910＝ 9歳：

明治天皇没・1912＝11歳：

父が政治道楽で家産を蕩尽したため、

中学校を中退して上京、

第一次大戦終1918＝17歳：早稲田大学英文科に入学。横光利一・友田恭助らと同級で、他学科には浅沼稻次郎・三宅正一らがいた。

ベルサイユ条約・1919＝18歳：

生活費を稼ぐためアルバイトに迫われながら、仏教やキリスト教に惹かれ、

原敬首相暗殺1921＝20歳：

在学中に結婚、_{万朝報}の懸賞論文で1等になったこともあって、

関東大震災・1923＝22歳：

中退、_{大阪今日新聞}記者となり、<関東大震災>に際しての朝鮮人暴動説に雷同した東京市民の醜態を痛嘆、<虎ノ門事件>弾劾演説会で来阪した高島素之と運命的出会いをする。高島の雑誌発刊を手伝うべく東京に引揚げたが、実現しなかったため、翻訳等執筆で生活を支える。

治安維持法・1925＝24歳：

唯一人で建国祭を計画中の赤尾敏に紹介され、相互に認め合う。

金融恐慌・・1927＝26歳：

*初の著作「ファシズム・イタリアーとムッソリーニ」を高島の序文を得て刊行。

共産党事件・1928＝27歳：

高島が死去。

世界恐慌・・1929＝28歳：

_{急進愛国党}委員長、

満州事変・・1931＝30歳：

この間に、社会主義的部分が減じ、_国家主義への転向が進み、

国際連盟脱退1933＝32歳：

_赤松克麿を理事長に{国民協会}を創立、機関誌{国民運動}を発刊するとともに、政治的实践運動を主とする{青年日本同盟}を組織して会長となり、

芥川直木賞始1935＝34歳：

*「日本主義運動の理論と実践」に至るが、「天皇機関説」排撃運動に参加するも、軍部を利するだけと退き、

二二六事件・1936＝35歳：

<二二六事件>の挫折で逆転向、{やまと新聞}に主筆兼副社長として招かれると、

日中戦争始・1937＝36歳：

_紙上で現状批判の論を展開し始め、戦時体制下で体制側の悪と矛盾を突きまくる新聞にし、

第二次大戦始1939＝38歳：

阿部知二・清水幾太郎・林房雄・茅原華山・松岡駒吉・倉田百三ら左右両翼から声援・賛辞を送られる。{文芸春秋}に別名で"新聞月評"も連載、日英会談に際してイギリス大使館に示威行進した国民の雷同性とその非礼を嫌悪、3回目の中国旅行、

大政翼賛会・1940＝39歳：

*支那派遣軍総参謀長板垣征四郎の「派遣軍将兵に告ぐ」声明をモラリズムから攻撃批判、同年の帝国議会で斎藤隆夫の反軍演説と貴族院での田沢義鋪の質問演説に並ぶ風格を示し、無産運動家松岡とも意気投合、言論報国会の創立に尽力し、初期の常務理事兼総務部長を務めるも、

日米開戦・・1941＝40歳：

大政翼賛会を脱退したが、<日米開戦>となって再び転向し、

近代の超克・1942＝41歳：

翼賛選挙に出馬し、「日本国家主義運動史論」を刊行、

創価学会検挙1943＝42歳：

*中国人民と蒋介石への洞察でも当時の知識人の水準を抜いて、「中支国交史論」などを著すなど、矛盾をかかえながら右翼理論の指導者たろうと努めたが、

敗戦・・・・1945＝44歳：

<敗戦>となり、直後に養田胸喜が縊死したことに好きでは無かったにも関わらず心を痛め、言論報国会会長だった徳富蘇峰らが戦犯の指定を受けて、自らも覚悟したが、公職追放に留まる。

新憲法公布・1946＝45歳：

日米安保調印1951＝50歳：

_追放解除後、

_革命後の共産中国と日本が手を結べるかが課題とし、赤尾敏らと{東方会}を結成、

55年体制始・1955＝54歳：

_都市議員団の一員として、戦犯の不安を抱えながら中国を訪問、その建設途上の姿に、かって自らの描いた国家社会主義の理想を見出し、中華人民共和国を全面的に支持するに至る。

インスタンレーヌ・1958＝57歳：

「私の昭和史」、

安保闘争・・1960＝59歳：

東京オリピック 1964＝63歳：

石油ショック1973＝72歳：

中曽根内閣・1982＝81歳：

昭和天皇没・1989＝88歳：

_没した。